夢函紀談

十九北

終

413
561
10

113
561
10

當山紀談巻之十九目次

一 細川忠興曽の立物の説
一 忠興飯河豊前同肥後父子を誅せらるる事 弁肥後が妻節義よ死る事
一 黒田満徳九袴着の時母里但馬舞をまひ〻事
一 亀田大隅江戸の石壁を築き〻事
一 吉岡建法狼藉太田忠兵衛手柄 弁太田武技を論ずる事
一 柳生宗矩剣術御師範の事 弁宗矩先見の事
一 板倉重昌肥前國鳥原の賊追討の事 弁周防守重宗先見の事
一 川北九大夫肥後國川尻を守る事
一 天草の一揆夜討の事

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

一 鍋島榊原鳴原城先登の事
一 黒田勢天草丸を攻破る事 并黒田睡鴟武畧の事
一 水野勝重父子有馬永純本丸一番乗を論ぜらるる事
一 陣佐右衛門一揆の長四郎が首を取る事
一 松野亀右衛門鉄炮修煉の事 附 松野才覚の事
一 藤堂高虎阿濃津みゝく勢揃せらるる事
一 福島正則領國を召放るゝ始末の事

常山紀談巻之十九

備前國　湯浅新兵衛元禎輯録

○細川忠興よ曽の物ぎたをいふせばうといふ方のみゝ詳よ
書ちらすゝ使まあゝらまゝろう使立物の下地拙れ本とおさ
ゝる八折やをきものゆくいゞゆらんといへば忠興色を変じ
汝八弓箭取の使ども笑ゝぬるう軍よ陰む者誰ら生て為ん
とゝゆべき二つなる命ぐるよもゝのう何条立物の折るを厭ふべき
かゝるたゝてよゝるき立物の折るゞうよ働をゝゝば何のんぐゝ
き事あゝんひと面目ゝてゝあまゝといゞまゝろう
天正元癸酉年七月信長淀の城を攻落されゝふ岩成主税助
を細川藤高の士下津拉内打取ゝ時忠興八ッの年なゝるゞ

長岡監物が肩ゆのうく監物が立物鹿の角ゆえつき見物て
奥より入こりを人見く後年の生きたをもそうらこと

○細川忠興豊前より丹後国外竜王の城より飯河豊前宗祐禄三千
石岩石の城より長岡肥後宗信禄六千石宗祐の子寵せこまく
長岡の姓を与へらまつゆ父子とも罪有く芸州土年七月廿一
日二人とも誅せこる宗祐ハ河北石見逸見治左衛門を討ゆと宗
信ハ増田蔵人を討ゆとせこる宗祐散々ゆ戦ひく死傷多く宗
信が妻ハ朱田助右衛門是政が女なり宗信と睦こうこそ対面せざる
事三年より及べり忠興是改が後室の尼雲仙院といへるをよび
て豊前肥後罪有く殊さとへども汝が女と孫の女より罪なく
密より告知せく命を助けよとなり後室の尼ゆく肥後が妻常

小中より〳〵然までも夫をすてくかるゆよりけがまんとハ得そ
存まつくれど仰の忝きをバ告やきんとく文〳〵告やりけ
まバ誠より仰ハ忝々まで今ハのきハより夫をすてく道まん事
人道ゆあ〳〵女子ハ東西をゆ記まへざるゆまバ養育〳〵てゆ
ハまとく使ゆつけく尼のりへ送りそ宗信是を聞て大ゆ悔
み我過を謝〳〵終ゆ共より自害〳〵うそわ

○黒田長政の嫡子満徳丸と四の歳袴着の祝ひゆ母里但馬ハ
ひき目親ゆく常ゆぢいとなるつゆまつが其時但馬満徳丸の髪を
かきなで〳〵く成長〳〵く功名〳〵父上ゆりよくまつゆ人とゆれ
バ長政何といふるすぞや我武器をさゆみとそるゆ若きゆハ汝又備後
山栗〳〵相謀りき朝鮮ゆりとゆう又関ヶ原の合戦も皆汝ゆが扶

かよしバ大敵に勝より其後世太平なれバ立べき武功もなし
満徳いかにおもふとも我を越る事存もよらばとて膝立直し但馬
をにらまへしバ人々汗を流させしに但馬かさへに向ひく
故なき怒られ人の子に功名しあへと云ハひが事なりとく物ともせ
ざる体なく長政此方を見ん向もせば長政いや父よりまされと八
いかにと怒られしかバ但馬守うるはひ心を静めてのたまへ武功ハ幾
度事にあひても仕そんじたりと思ふ事はなく度ごとに不足
ある者にん他人ハ出すぐひなしと褒られても黙してゐるに
よれ軍兵を引具し地の利よく幸に勝すべきを自讃ハ以の外
のひが事にてそれへ今まで勝軍になまして毎度斯のめぐなる
らんとなりバ必敗北あるべし味方崩れたる時一足も引ず討死

ハ殿の得ものなり其ハ大将の道にいたれバ味方を討せバ軍
に勝を良将とすれバ殿の武略進む一途ハ得とのなくおまゑせてれ
進退図に中る一途ハかけくおそれしまれ此是非の論ハ備後老
功の者なくれ問時とそれせよへ満徳との只一人かけ出て討死
する事ハ葉武者の業なり死ぬやうハ軍に勝を大将のさ
にハまする事すれ此詞よく覚えおくとてより能しかへと髪を
なでく長政の怒をおしも見つねらしきなり備後守次の間
小酒宴して有しが吸つけて銚子かたらけ取持くきえアし出長
政の前に跪き憚も顧ずすゝめなりれととく盃をとゝむ若れ
時如水公の小性なりしバ御酌ハいさしなくひし小笠原の礼
義存出しけとて酒をすゝめたまバ長政うちとけ盃をかく

ひけらまくらバそまを但馬よ賜ハりゐへとて氣ちがひよそれへ
罷出よといひそまバ但馬すゝみより其盃を戴きて三度引
うけ飲て後殿ハよゝあたよ怒りゐひ今日の祝ひよ奥さめ
れ少し酔めへといひしらバ長政も又盃よ十分引受られ給ハ
但馬いぎ有よて田村をうゝひ出し舞ゝまゝうの鬼の
如くなる男ハ誓古せしろ拍子も耳目を驚ろせり皆一同ハ
兵のまゝりとうゝひく酒宴盛よなりそれバ備後守高声
小若き人々能学まてよ心掛の深たも殿又思慮ありたも殿ハり
大ゝハけハ但馬又さのりゝきハ但馬なり黒田の家ハ武勇
目出度時ぞよとゝなゝ酒を酌ゝ事有ん時鎗を合せ
たゝべき事をゝおゝ的ハ何事もゆゝゝゝ人ゝうゝへや

舞やとく酒宴やゝてそりゝ又長政或年の春歳初の祝よ栗山
備後ちがめゝふ行まゝよ酒宴あり四ッ比よ及んく長政ハれ
居ゝゝハ若き老ども酒おのゝのゝど得飲ゝあとゝて却とけく
酒ありせよとて帰らまゝふ但馬今少ゝ居く若たのたよ
懇よ詞をうけ人々悦ぶやゝよゝて有ゝゝまゝとかく我まゝの
ゝゝぬ殿たのり頂よ大なる盃をゝくゝてよゝうなあと大音
ゆく云ゝを長政ゆぬ体よく帰らまゝゝ

○江戸の石壁をきづゝる時浅野長晟仰を奉ゝく亀田大隅
高綱を奉行ゝゝ石壁成く後崩ゝく事三度よ及べり
台徳院殿却ゝ御覧ゝて何とて崩まゝやと仰有ゝふ亀
田謹で其事よん大隅軍の時鶴ハ鶏の鎗を提げ先ゝけハ

陣つひに崩るゝ事ハなかりし石ハ無心なるものにくせんかたなく
れとやれ事終りて鹿毛ぶちの馬を大隅に賜ひけるに士の
二毛の馬に乗ることやハゆげなる事もあらんに口惜くれとりふ
を土井利勝ゟ上られしかバ別の馬を換て與へよと仰られけ
り亀田大剛の者なりし十文字の鎗下坂忠親が造なりしとやハ
鵄の觜に造り栗色にぬり總螺鈿の柄なりけり

○慶長年中禁裡に散楽の有りし時貴賤群參しけり吉岡建
法といふ染物屋劔術の妙手なりし有しが無礼の事有しを
雜色咎めけれバ建法外に出羽織の下に脇差をかくしかと
の所に入先の雜色をはじめ一打に切り夫より縱横にかけ
廻るかとおもへバあまたなるまでの手負數をこしらへし板

倉伊賀守勝重日の御門にありしが眉尖刀の鞘をはづし向ハ
まりしを太田忠兵衛何条手おろさせ申すやあるとてかけ
行ぐを勝重此長刀にてよく防へられしかバ太田吉岡に向ひ
悪逆無礼のものなれ首をのべよと走りかゝれバ吉岡ハ紫宸殿
の階に息つぎ居しが我に太刀打せん者汝なるべしといひて
階を下りて立向ふ太田已に眉尖刀ハ無益なりといふまゝに
刀をぬいて吉岡走りかゝりきはに倒れたり太田大音あげ倒れ
たるを切ハ士の恥なり立て勝負せよといふ吉岡立あがる所を
飛かゝり一太刀に切殺しけれバ勝重悦びて太田に禄を増し盃
をたまはりて後吉岡が倒れたるを切ざるハ勇なり有といへど
と氣に驕の失ハあるに似たり吉岡商買賤しき身なれとも

剣術ハいくさの人も及びがたく倒まゝハ天の典へなり然る
を切ざるハ虚を打の理なくしてもいつぐきあやと云まゝふ
太田仰誠ハ辱くれこそ一ツ存る故のれ多く敵の倒まゝを
わすれも立ぎおんとするあ小身を忘れ脚を切まゝく倒ま
さる者の勝なりれ倒まゝるハ虚実の二つなる吉岡ぞ倒まゝれハ
虚まゝれ吉岡ぞとひ実ハ倒まゝるも寄やまゝく斬まゝ男小
あまゝ倒まゝ所ハ身を防く事虚ハ似てれへども近付あまゝバ
切んと存ハ実おくれ虚おも実おも倒まゝれりの立あゞら
ぬといふりハなくれ其立あゞる時ハ躬を防ぎ敵をきり
もゝもんと存る心虚ハなりれそこを打く寄やすく切りあ
りひき誠ハかゝる小き業匹夫の事おく殿のもゝめれ理ハ

てもれまゞされども陣をはなれ軍する道おを相りなるひれ
事りやと悍を省ざゝくやゆてれとゝへバ勝重大小ぞせ
らまゝ

○柳生但馬守宗矩ハ大和國おく世々柳生の庄ハ地頭なり
関ヶ原の戦ハ後徳川家ハ仕へまりく父より剣術を受傳へ並
双の妙手と学ぶてゝり　大猷院殿御年ハりゝよりゝ
此技を好ませのひ宗矩御師範ハ御心を盡させのひ
頗其妙を得させのひゝり只此藝およりく其人を信ト敬
せゝせのゝ事おもひゝるゝ小実ハ其技ハよりく治平の政
事を喩ーヤゝるゝや常ハ御側の人々ハ天下の治めハ但馬
守ハ學びてゝて其大体を得ゝまゝと仰られゝゝぞゝるゝ

宗矩年老病重くして日も辱くも家に入せられき正保三年三月終に空しくなりぬ其ころ其さきのあき贈位の事を執し仰られ従四位下に叙せられてこそ宗矩死せ後事ふかく生く世にあらば尋問べきものをと深くこそ

こそせ仰られしこそ誠に有がたき事なりし其中一事相傳ふるハ鳩原凶徒の乱江戸にゆきて頃ハ十一月十日に宗矩有馬玄蕃頭豊氏の家に散楽有く行向ひしに家隷多く但馬をを呼出し肥前國鳩原に土民相集りて楯籠りいひぬ是切支丹宗門の者ゆく松倉よそひきいての事なりと早馬来り板倉内膳正追討の御使を承りもや法度向いとでやるる宗矩さしぬ体ふくめるの所に帰り望し用人に向ひ急く

宿所に帰るべき事出ぬよ御馬をかしこへといへバ心得さりて馬に鞍置く牽こし宗矩お乗ふく品川にさせ付板倉ハ如何にと問バ遥にさしたる池ふく問バ今ハ二三里も隔りたりとやいひ日已に暮ぬ及べバ引返して御城にあがり近侍の人々をいとやべき旨ふく伺候しいひぬとやせばやがて御前に召ふく何事ゆやと仰有宗矩畏り只今兼りへバ九州に切支丹宗門の逆徒発起し内膳正重昌追討の御使を兼りたせ向ふよし仰と称しおとゞひべきこと存追ひけりへども追つゞいに此よりやさん為なりとやいひ何故におとゞめんとハこそあるべこと御尋ありさんれ君ハひさすこの土民だに立ぶるりいとこそ召ふく追討の御使かこそこそへ宗門に付ふく起る軍ハ

大事のあれなくば重昌一定討死仕るべしいふまでもなくぞ
めでたやと存ければ以の外御氣色損じ御座を立せ
給ふ宗矩は夜ふくるまでも退出せず此よし聞召又御前に召
て重昌討死すべき子細いかにと御尋あり宗矩されば候て
兵の道は勇を先とし勇士は死を悲まず三軍もみな恐れざる
は今の名将の専一とする事にて候に凡愚の輩宗門を深く
信じ其法をかたくまもりて死をもて身の悦とし百千の人死
を恐ざるの勇士となりぬ是は宗門のなすところにて候へ織田家
の武威をもつて一向門徒に勝事能はず天子の命を假て和平
になりぬ三河國の一揆も近き御家の事にて候へ大坂
の時重昌年よりたりといへども数十万人に撰ばれ唯一人大事の御

使承りたる者あまたあれバ是等の土民打亡すべきに何事か有べき
誰々は其下知を背くべきと思召さるゝは事の違ひにて候べし
重昌位高く禄も有りて年頃重き職を司つて常に人の敬ひ
はなれには從るべく候へ今の重昌が身にて城を攻はじめ西國
の諸侯いづれは下知に従ふべきおぼえなきと似ず攻あぐみて候ひ
なんには又御一門の人をさしむけらるゝは宿老の内重き人を追討の
御使下されさふらはゞ重昌何の面目ありて生て再び
関東に帰るべきなれば人を土人等に討せ給ひなん事誠に口
惜く候へ是は御家の恥辱とも申べきにや御をしを蒙
てはじめ追付参りてとかく押へとゞめて具して帰るべき旨を
と憚る所なく申けれバ御後悔の色ありてしばしさせたまひしか

そまも叶ひがたくや思ひ召れん夜も更てうちくく入せのひ
しがバ宗矩も退出しひそうに人をかくと語りそるとうや誠ふ
宗矩が計ひ事掌をさしがごとくなりしバ尤深計遠慮
ありてそやべき

○鴻原ゆく寛永十四年切支丹一揆の時討手ゑ石川主殿頭忠
綱板倉内膳正重昌なるべしと云々を石川ゆく我年老う
板倉其器ゑ當まりといへるまりが重昌仰を奉り肥前ゑ
趣き城落ざりしバ又討手の大將を下さべしとゆを石川
なて我始ハ其撰ゑありん事をさの〳〵悦バざりた今思ふ泰平
の世ゑ徒ゑ死んも志ゑ非ざあれ仰を奉りく西國ゑ趣くバ
やとそいへまるる重昌統紫ゑ向ふ時京都まて所司代板倉

周防守重宗ゑ對面あり〳〵今度の仰を承る事辱きゆを述べ
らまりう重昌既ゑ京都を立く後重宗重昌ゆ内ゆ不を察
さまるゑ必討死さべし再會ゆ已までなりといへるまりう松平
伊豆守信綱肥前ゑ進發せまるるゆく重昌城を攻て討死
せまるまりう人重宗ゑ其いそれをとゑ重宗城ふこゆ是ハ
百姓の身ある故ゑ内膳正忽攻落さべしと思へる色あるハ
まりう是ゑ此城を攻落さるゆ一揆の奴原さの〳〵功
名ともいひべるゆ只今四方無事の時一揆ゆ起ゆ城ふ
龍くく降參するゆ悉うち殺さるゆん事を知く其心
一和さべしきやさく落べるゆ日數を延バ又他の大將を
指向らまんゑ内膳仰ぞ生て居るべき吾是を以く討死せ

ん事を知ぬといふそれなり

○細川忠利の士川北九大夫といふ者あり川尻の代官を勤めよと
なりふ出陣の時供よ連らまるべ代官の職つとむべしといひ
くまこバ尤とて出陣の時供せざるべしと定めらる天草ハやもす
まこば一揆をなんすと西國の人れいひらる事なれバ心ふりけて
川尻ハ海を船の着く処ゆく細川家の米藏あり天草へ海上
七里ゆ川北兼く地鉄炮の数をもつべ至るり地鉄炮とハ天
草の一揆起るとゆく川尻の海岸よ一間よ一本づ竹を立させ
一本ごとふ火縄をゆひ付五本よ一人の地鉄炮を配とるり後ふ
天草ゆく生ぞるまつ老のいひらるハ其夜川尻の米を取ん
為よ船を打出くるふ川尻よいくるもなく鉄炮を備

へ見るるる故ハ熊本より軍兵のたゆ川尻ふ来まろ
るく船をあぐるるるるふ川北なろうせば川尻の米を取
ま天草の城ゆたく破まるるるふ川北ぞ謀ゆく天草
の粮ゆく為くるり
○天草の一揆を圍攻らるよ城中粮米既よ乏しくなれバ
夜討しく米をとるんと本田但馬ぞ謀ゆく先鋒早口の塀の
外ハ水を汲ぜるる時鉄炮をあるべく実手よるんせるるかるる
事三度よ及く後よハ漸そよ遅く夜よ入く汲ぜるり是ハ夜
討よ出る時の鉄炮ハ火を見処あるぜるとのるる其後毎夜
塀裏ゆく切支丹ハとるんぐと天帝といふるを数千人一同ふ
をめくるる為付ふ出る物音をまぎるハさんとの謀あり

かゝく寛永十五年二月九日の夜五百人をもつて黒田忠之の
陣所よりよせ二陣の兵二千人を二手に分ち縄ぎすきして
額にハちまきを鉢巻にして相辞ハ九ゝ九と定め首あるそ
食物をとり来るを第一の功名ふせんと下知し諫早口より
出く出郭のかゝへある有江口へ退入るゝと定め陣屋を焼ん
為に捨の木を削りてかゝ腰にさせ丑の刻ばかり月
もなかりふくゝゝを便に黒田の陣所に押寄同時に鬨の
声をあぐるハ城中にも鬨のあるをたのハる士大将黒田監物志
よりぎハまいりく父子ともに面もふられ支へ戦ひ流れ矢に
中てくゝ討死しるまハ従兵四十三人枕を並べく討死をとり一揆
大に勇ミ進みるも黒田美作入道睦鴎扨ゝゆて柵壕きり

の手にかゝく寄あらの中に黒田市正高政鎗を提出あひ三人
突伏せ小性に首をとり市正をよりて一足もしりぞきなかふる
まじせバ軍神も照覧あるべし斬く捨るぞと呼ハるあをを一揆ゆて
髪ハ破りぐゝして寺澤兵庫頭忠高の陣所に進み行三宅
藤右衛門支へ我ひ痛に負ふ一揆又鍋島勝重の陣所井楼
に火をかけるふ松平信綱より夜廻りの士岩上覚之丞尼
子八郎兵衛紀州の使者山中作右衛門と打連て来るを山中
ハ銀の曽に十文字に鎗を持さんぐゝに相戦ふ鍋島の軍
兵馳集て入まとてぐゝ防ぎくふ竹把に火をもえ付く白日
のめく一揆かなくでしのくゝ時四郎矢倉に有て勝負をつ
くゝせそまとりて城中静まりて其後水野日向守勝成鴻

原より居陣し黒田睡鷗より夜討の有様かくせぬくむりより
四方を固く取まわし竹把を付柵の木二重三重ゆひまわる事手
の陣より討く出る事を聞び古今無双の武畧をまわる一揆く
さまでも一揆を一名招てたくさんハヨゲ士卒なるく云まくり
○同じ城攻より鍋鴉の志より塀二三間だらりふ竹把を付ける軍
兵ひしと押寄居くるふ城中殊の外より静なるまバひそふ塀の
内をさしのぞき見るふ一揆一人もなし士大将鍋鴉安藝を
聞塀裏をたしのぞく其有様只今攻入べきなりしバ
あくやと云程こそあれ我先よとかけ集る鍋島の陣ふ附ら
れし榊原飛弾守のさぐも竹把を付習ふくく毎日かくり
ふ来たりぐ是をうくいぐとりまくふ押寄る榊原の嫡子

左衛門佐真先かけく乗入るるまバ戸田左門氏鐵の陣所より諸将
集たくく軍評定ありし時ありふ井楼より鍋島の軍兵只今城
より攻入ると望みるさくバとくく諸将陣を寄くく攻落されくと
其後勝重ふ今度軍令を背き城攻有し事を問るふ勝重兼
ア榊原父子先かけして乗入ふうへハ目附を討せく叶ふまじと
不意より攻入ると申さる榊原より問るふ嫡子わくくん若き奴軍令
を忘れ先かけしるる故恩愛ふひるまき子を眼前より討せらてハ
生ひなし父子ハ同罪と存つづいく攻入ふとやさまくられで
鍋島し榊原も門をとぢくちひ込まき三十日ありく御ゆるされ
なり勝重人よりのあづかふ筑紫わく卒忽の城攻せし罪ハ
給ハり乗まよりいそまりしば江戸わく城攻の卒忽人よりて

勝重の通らるを珍しげふ観るとなり又柳原やされる
ハ若き者どもに竹把の付やう習はせ度ハ攻口四五間合ち終
さまてなり皆くるしハしと云ふ勝重ゆ入ハ日ぶ
攻口を人ふとくる事やある一寸も叶ふまじと答へらるふ柳原
ちひらまてうバ飛州の士を日ぶ士なるさ〳〵加へらまてよといと
きてるり此時一丈ゆくもちけさバ領地を削らるべきよう議
なりくるふ勝重の遠き慮なり〳〵ある其事やみ〳〵りと人々
いひるるそ

○黒田忠之天草丸を攻る時本田但馬きび〳〵防ぎ支へて先
陣攻入得ざり〳〵バ忠之直ちぶく進まるるを黒田瞻
鷸物具特むよきるぬとハやせぶ大軍を下知〳〵ふ系此

甲を忘ざれバうるるると人の潮さんべ〳〵といひるるまバ
忠之物具とつく肩ふらけ曽をバ忘ぶてゆぬぶひ出て鉢巻
走り出ひぶ士ども年比吾家の恩よみち〳〵奴原ふハいふ
く進まぶるやうれ此慮を一足も引まじきく鎗の鐏を地
よさ〳〵み折〳〵きくするあ老先を下知せるる雨の如く弾
出ひ後殿よ打さくあられるあ〳〵り瞻鷸ハ色を余所ろ
見くひ之居〳〵うバ忠之何とく一方を下知せぶるや年老く
老耄〳〵るうと大音あげ歯ぶみ〳〵く罵られ〳〵うぶも少も
騒ぶいまぶさやくれとちぶうふいへバ忠之いよ〳〵怒り罵
らまてを弟市正彼入道ハ物〳〵ふくれまるせられひへといふ
所ゆ瞻鷸つと立上り麾を取かりひへといふ刻の下より軍

兵一同ふどつと進みく天草丸ふ乗入攻取さう後ふ忠之脇路
を近付軍兵我下知を用ひぞ〳〵く汝ぞ一言ゆく忽城を攻破り
〳〵るハいかるるあぞと問まふすべく城攻よ四方より押寄せ
先陣ひ〳〵と攻つむる時を見そうりく無二無三ふ進んでも負死
人を顧ぞ乗入りへバ攻破さるるすを拾ふ四方の味方いまぐ押
寄ぞ一方より攻破らんといそだりへバ城中も外の防をすて
先きびく攻るるを支へふものあ外ハ持口よりも防ぎ甚
つよくふ其ひまふ一方より攻入ふ時ハ容易く撃破りふ早返
るるすハ却く手後さるる事常の理ふふ臣このよるまへを
ちりくちづまりせりへとかせぞ殿いそぐせらまるあ味方
よ手負討死多うりきとそれバ忠之高政そもに大ふ感せ

らまるるり

○鳴原を攻落さて府水野義作守勝重ハ江戸よて賜はるる白
川月毛といふ逸くまりき馬よ乗戸田氏鐵の陣所よりもぐ
陣所よ急切く帰らまりふ勝重の軍兵ども金北東の〳〵北馬
ぞりをかるるより我先みといさみたるを勝重馬上よて曹を
ふく忘武者奉行河村弥八士大将上田玄蕃ふ向ひとぐ下知
ゆき以前よかくるるバ軍神よかく斬棄よと大音あげ
て呼さり麾を拔出〳〵軍兵をすめ塀を破りをあきはら
んで攻入りるふ自分馬よりを鎗を杖ゆく本丸を目ふかけて
進まく嫡子伊織十四歳さ高えよかけ出るを祖父の勝成
後陣より見く本丸をうち破まて下知せるる本丸ふ出そこ

あるものは數千人ゝふを限とそひ定め防ぎ戦ひ給ふを討ち
者多し鍋島の軍兵ひるみくづるゝ処を水野父子横さまに
よ面もふるゝまで切ゝりて三の丸より本丸へ逃入一揆を討取る事
數をしらるゝ本丸の石壁より打出る鉄炮の玉叢の乱ちるが如し
石壁ハ五間七間計も高く登り兼るゝを小水野父子大音
あげゝ今日本丸を攻ゝずハ生く雑ゝ面を向べき死やくと
あくゝふ呼ハりうてども射ども引ども先ゝ攻かゝる
旗奉行神谷左之允旗十本の内一本持せ来りゝ自分ゝを
かけ本丸よ入んとゝ纔奉行進藤七兵衛小野田正左衛門金の
束の丸馬印をふりかゝげ来りゝ松の丸よ押立ゝ神谷
も旗を入水堀父子の兵念なく石垣を登り本丸ゝ攻入るを

勝成三の丸より見やりゝ今生の思ひ出なり美作ハ大
坂ゝ武功あり伊織ハゝふを始め此軍ゝ本丸を攻取り
事家の面目なりとよ称ゝ有馬左衛門佐康純乃
嫡子藏人永純ハ寺澤忠高の後陣なりゝ唯一人従者よ鎗
をゝ世寺澤の先陣をかけぬけゝ天草丸の方へ乗せ入本丸
ゝ進んで五間計の石壁を登り今日本丸の一番乗有馬藏人
なりと心ある士ハよく見ゝへと呼る処よ勝重此士鎗木半之丞を
ゝる首を石壁の上よ置ゝ息を継居るゝ此声をゝく鎗を横
ゝ藏人よ向ひ只今ゝよ来り一番ゝハ何事ぞや本丸ゝ水
野美作守攻入旗馬印入置ぬ二番をなゝバ是へ上ゝせゆへと
いふ藏人笑入らるゝハ唯一鎗よゝちゝへるゝきゝる上ゝ水堀

の旗本丸に建しを見てけれバ美作守につゞきてハ蔵人なり
といそぎけれバ其時鈴木申さく美作守父子の外大将ども
ハいまだ本丸にハ見えずまぎれもなき二番にてハとて手を取て
石壁に引あぐるに永純ハ其の丸くゞり遠ひの處に進ミ行美作ハ
ハいづくにやと問ふに神谷美作ハ腰郭の上に居て爰に旗を入れ
と答ふ永純聞てさてハ美作守ハ我より後にくるとみれといそぎ
まゐり永純本丸に押入りしと勝重が許へ使をまゐらせて只今攻入
らせよしく有所によりあし夜に入て一揆討て出る事
もあるべし爰に一所に有て下知せられまゐらせへしとなり蔵人が許も
あへば作州ハここよりも後に攻入まゐらせよ蔵人ハ一寸も敵近き
所を好まれねども後へハ引れハせじ一揆打て出るとも蔵人爰に

あらバ危きこと候ハじと答へられけり勝重よろしく詰の丸より
切て出バ敗北あるべしとて士三十人計鎗を横たへ鉄炮を其に
並べさせ蔵人ハ鉄の楯を取寄前に押立て夜の明るを待か
けるまゝに一揆討て出ず信綱下知して勝重も鍋島の陣
に入かくてまゐりけれども永純ハおそかりけれバ使度々に及て引くさ
まゐり落城の後三月朔日永純勝重の陣所に行本丸の一番ハ
蔵人にてありしに勝重年若くて左のみに本丸の奴原今日を限りに
防ぎけるを美作ハ父子打入討破りて旗を一番に入し
事誰もあらそひなかるべきと答ふ鈴木も進ミ出けれバ永純まさ
鈴木が申せし言もいかで忘れべき作州父子ハ一番とおもひて
蔵人二番と申せしも分明なりされども旗入まゐらせし所に行て

ものゝ夫よりそるゝの跡よひくてそをそゝまき鈴木も旗を
證ゆゝく利口をやゝまこゝろあゝよ一番ハ義人うゝと云まゝ
ハ勝重宮ゝと陣所よ在ゝれバゝく旗を一番よ入ゝハ是軍の法
ゆ於ゝく誰ゝハ一二を論ずべき父子ゞ兵ゞも身を棄ゝく力攻よ最
一本丸を他の一番ゆ定めん事ゝひも尚ゝいぶ能思慮しゆゝと
答へらゝゝゆ永純旗の前後ハ論ずべゝ將ゝゝものゝ先ゞけハ義
人ゞ外雑ゝゝ作州ハ跡より使をまゝうゝへバ一番ハ蔵人なゝと怒ゝ
まゝゝば勝重只今のあゝゝひ無益の事よゝ軍よ慣ゝる物しゆ
向ゝく一二を定めゝれゝへといゝれゝゝバ永純おとけゝく小性を呼び
茶を飲ゝく出ゝれゝゝゞ鈴木よ向ひいゆも詔和らゝ云ゝく帰られ
ゝゝバ藏人もなみゝゝゆゝゝゝゆ人なゝと誉ゝゝゝり

○一揆の長四郎ゞ首を細川家の足軽陣佐右衛取ゝゝり二の丸ゆ
て鉄炮よゝゝゝり倒まゝゝ者ゝれ首を斬ゝゆ忠利前髪ある首を
ゝゝり出ゝを鞭ゆく彼首をゝゝ四郎ゞ首ゝもゝゞゞまゆ雑ゝ
見知ゝゝゝと向須佐美権之允四年以前よ四郎を召ゝゝひ
事のゝゝ紛ひゝゝ四郎なゝゝり左の耳れ下ゝ瘤のゝ是其よゝゝく
ゝく生捕ゝゝる四郎ゞ母よゝすれバ吾子ゝゝゝとて波倒まゝ
ゝば忠利使を遣ゝゝ首を石谷十藏の方ゆ送らまゝゝり後
陣ゆ千石の禄を與へゝる
○鴻巣の城攻よ細川家の士大将松野亀右衛つ井楼より
よ本丸と二の郭ゝ間ゆ坂有ゝく人集る中ゆ大紋の羽織着ゝ
る者ゝゝり松野指ざゝく鉄炮ゆく打ゝゝるゆ五町ゝゝゝゝて

さて中よりあらくそれより空箭あく打しうバ彼坂を夫より後岩戸へ通る老身をかゞめ走り通るとぞ松野ハ鉄炮の妙手留刑部一火る学びく妙を得たり

熊本わく一丈の筒をとゞ居しゑ庭の南天蜀れ実をひよりるの果て喰るをかなものちをめく茶をとゝ目的をたゞ着わく火をけしく打ゑ中らぎる事なし鳴系の前ハ事なりゑゑ細川家の長臣南條大膳恨をふくむ故有く細川家を傾んとを謀りるゑ其比深く密する事あるく泄ちば細川家の倘ある事を知りられバ先切支丹の事訴へくり江戸より南條をあす細川家驚きるまてゞせん方なし松野我ゑ為せらまよとて囚人あれバ厚き板わく詰牢をはたくり醫者一人ゑ密謀を云ふあ熊本より出るゑ天氣を待くく慶ふ舟をとゞめ日を経る内ゑ人参の入るる藥をあるゝへ朝夕の食物まゞく人参湯ゑて飲食させるり南條ハ氣の鬱しるゑ上人参数百斤飲るしらば心狂乱しるりゑと松野江戸ゑ打是し至るく南條ハ数年狂氣の者ゑとゝく出るり切支丹訟の事を向くゑ狂言けくなりとく熊本ゑ帰らゞしくく松野ゑとゝれぬ奴謀さて醫一人のく知りと云り元和五年藤堂高虎領國阿濃津わく俄ゑ勢揃をせられけ人或ハ怪しく或ハ高虎何事ゑ謀反とゞきや万ゑ一も反心あくバ事を密ゑとゞきふ所ハゑ人のおどろくべきやうゑ

なくなる八子細あるんといひしに福島左衛門大夫領國を削らまとなり

○福島左衛門大夫正則ハ関ヶ原の軍功ふかくく尾張の清洲より安藝備後を賜ハりなるゞ物荒く政悪きのゆゑなるゝ多く毎罪人を殺し且　東照宮ふ對し奉り無禮多かりしれバ元和五年　台徳院殿御上京の時領國を削らまとなり

本多上野介正純より就く廣嶋の城池を浚ふべき旨をもて申上べきよしを答へらまとしゞ御上京の事繁きゆゑ其事なりしふ度嶋の城普請ハ事をゆゑ召怒らせるひしふ正純其時發ゆきく正則の書翰を出ままとしふ證文の如し後まとしく聞し召入らまとべとをいなり

二條の城あゝく土井大炊頭利勝藤堂和泉守高虎をめして此事を仰出され議決せり

板倉伊賀守勝重此事ハ井伊掃部頭直孝ふ仰付られよしく直孝を召御前よりふく福島左衛門大夫國を召放しるべきるれ召まとゆゑ其事なり誰ら使ゆせんとゆつゞと仰あり直孝京都よりの御使なゝバ江戸ふ残まとる者ゆゑ御の事弁へざゝやとゆ事もいべし只今江戸より罷出る者ゆ仰出され然るべし又正則を京ゆ召まと罪の趣仰出さまと申欲あるゝ又ハ國より引こめり思慮せよく仰られしても然るべくハ事ふよりて直孝罷向ひ打破かゝべしとゆ

和泉守若き掃部頭ハ似合ゝり但福島もちてゞの老

よく剛の者多あれば小路軍ゆるくいふあんとも
直孝和泉守ハ何方ゆく小路軍をしるべやと直孝が家ハ
ハ武功の老武者多し古き戦の事を咲しふ今川氏真の許
よて濱松城主井伊隼人を氏真の城下へ召寄誅せられ
し時小路軍ゆるく殊の外むつかしきとふ唯一事を
咲さりとしバ和泉守詞なし　台徳院殿いとれざる小
路軍の論ぞとく先退出せられしが井上主計頭を以て再び
直孝を召仰よハるぶ思ひさるゆる汝が言めでし人々皆
口ふいひく一同せば掃部が存る旨ハ従ふべしさて誰ぞ
使ハせんと仰ありしハ直孝が名の使久世三四郎　坂部三十郎
兩人よかりちんと存るとも申せバ是も符合せりとの仰ぞて

兩人使さりかくく酒井雅楽頭忠世太田善大夫を近付
福嶋左衛門大夫領國を召放るべきよし仰出されしり
福島ハさるゆる事をう仕出べきと危く思ふ
ありと語らまされバ太田いや何事ういべきと事もなげ
よいよ酒井又いつゆのうちやくゆる詞ゆる危き事とおもふ
とおされるまバ太田なるざる事をする福嶋ハあるべいす
べをもるざる者ゆてさハいべるまし福嶋ハ非道不仁の男な
まてぐん勝負の理をよくきりくれ男なるまバ何事も仕出さじ
といひしが果くく一言ゆと及バば仰の旨を奉ぞりき
六月小福嶋領國を削らるる旨廣嶋へ咲えるまバ福島丹波
諸士を皆呼集め預置まるる城ぞれバ　公方ハ仰ありしも渡

〳〵難〳〵又備後守殿為なまじバ渡さべきかと評論せて上月文右
衛門進出く人ハいかゝもおまき我ハ本丸を預りぬる上ハ命あ〳〵
ん限ハ人ハ渡さべく〳〵と切かり丹波心得さる氣色あり村
上彦右衛門く福嶋上月両人の男〳〵ハ同心の面々別〳〵ハ判形
せ〳〵まとゝく二通書く指出ス酒井主膳とく丹波ハ従子
なるゆ座を立鍋田主殿を呼いふ様ハ丹波ハ伯父なれ
ども上月ハいかゝ尤なりとゝへバ主殿も上月ハ同心〳〵て判形
を〳〵かりきバ皆是ハ同心〳〵と其時上月人く皆かゝの如く
なまじバ丹波ハ妻子を本丸ハ入らるべきやとゝへバ丹波即妻子を
本丸へ入そまとりとれ先ハ妻子をゝあそり城を受取べき
為ハ諸持うち向ハまゝ〳〵ば丹波吉村又右衛門水野治郎右衛門

二人を使〳〵く左衛門大夫領國召放〳〵きとゝよりハ仰の旨ハ
謹で承りハ然まとも主君預置ま〳〵城を證據とすべき書
簡なく〳〵渡さん事ハ人〳〵の存るゆ思ひやゝまゝハ次ハ領國
ハ入給ハん事ゆゑハ若た奴原無礼の恐まとゝ領國をさけら
まゝハ〳〵と送るさ〳〵バ左衛門大夫ハ程遠〳〵伏見ハある備後ち
の書簡を證據ハせんやと云せら〳〵ふ父子〳〵る事ハ論なゝと
ゝへども備後守ゆ領國ゆゑ城ゆもあ〳〵ば備後守ゆ言ハ用ゆる
ぞ〳〵とゝ正則ゆ書簡来ア〳〵ば城門の大ゆゆて書
簡を受取ぬさて廣嶋ハ船入二所あり人多くはとゆ〳〵く
士どもの妻子退去る時爭あゝやの恐まもゝとく一方ハ人を
とゝめ一方の口より退散せて城中の士ハ門ハ左ハ付礼服〳〵て並

び居城受取の使安藤對馬守重信ハ城門の右よそひて城よ
入まゝ
安藤城門よ入時並び居る〻人〻ゟ向ひたる事ヤべ
きやうもなしと刻をかけらる其時皆礼せゝ小獨茶筅髪
まくちゝみの撞木杖をつきく對馬守の詞をやかゝ
を見く礼〻を山崎甲斐守見くなみくちあゝぬ人
なりと知く姓名を問小長尾出羽と答ふ山崎退散の後
家族を呼ぶ〻又他國よ行ヤ寓居せゝまよとて使
をもく云せゝれゝよ出羽甲州の御事ハ兼り及びゝ忝
き言を謝ヤやゞて森義作ハ忠政礼を厚うゝく招ま
うバ森家よ仕へくるとなり

丹波と文右ゑつとハ密よ相対ゝく初より書てこゝるべたと
いひく同心する人なれハ別よきべき道なれよ事を二ツ
ゝく士の心を試ゝるなりと其比いひあり けく後
城をちゝふ決せゝ時丹波上月よ向ひ吾と文右ゑつ腹切ゝ
バ何事も外よすべき事なゝといひゝとうや
左衛門大夫罪せゝと呼く暇を乞ゝる士三十人ばゝ
あゝゝば挾間ゝゝといれゝ妻子を本丸へ入ゝるハ
諸ゝゝと名付妻子を城外よ出ゝ其身のゝ城をちゝらん
といひゝハ片龍とといふ後小京都耳塚よ札を立三色よ
分ちく姓名を書く世の人よ見せゝゆゑんさぬゝゝりの
面々ハ餓死よ及びぬといゝり上月ハ禄五千石士大將ゝ

正則上月が志を感賞し書簡をおくられる今度我ホ事
法許に於ては是に依て城を抛と存ればよし心底ならず入ば然
ども存寄なく此者早く城相渡しても後志に
不浅ろ存るとぞ存るとぞ書きたる大崎玄蕃長行も福
島家の士大将なり同し時大崎ハ備後鞆の城よりぞ秋田
下総も同じく鞆に有しが大崎を廣嶋にやりて己一人にて
鞆をまもり討死して名を揚ばやとおもひしかん大崎に向ひ
江戸より城を受取べき使近き内に着陣有べしとて廣
嶋にこそあられ然るべからんと云大崎おもへく殿の下知なく
て城を出んことおもひもよらずといふ秋田城中を出り防
戦の支度するなりしか大崎ハ柱によりて眠る外なし

人々大崎をとゞめるにぞ大崎おもひ秋田ハかくゆゝしく
防戦の用意せらるれども其事ハ思ひ定めたる事なく我
事ひまなりといへど其子細を問に大崎此城をまもり日本
國を敵にあてゝ万に一つも勝べきやあらん人々を徒に殺さんも
いらぬなり只我一人大手門外へ出て城代大崎玄蕃とて
者なりとて腹切ん後城を受取めん城の人々はそこにあらずんば
らまでよとて云く各のかたちの命に換るべし何れ用意の有べしと
いひけりかゝる所に正則の證書来り事故なく城を渡せし
かば大崎と村上彦右衛門真鍋五郎右衛門と同じく紀伊の家
に仕へけり大崎ハ若き時木村常陸介師春に奉公し後正則に
仕ふ鬼玄蕃といはれしものなり関ヶ原の時尾州清洲の城

小大崎を攻まゐらす石田三成大垣の城より使を以て福嶋
家ハ太閤の恩篤き人なるまゝ今度無二の味方より清洲を明
らまゐらせ兵を入れんとぞ申べきうる津田備中繁元ハげ
ゆもとおもひく同心すべきよ長行事ハいろゐもせよ殿の仰せ
なくく他國の兵を城ゐいまん事存もよりハいとゞ兵
を寄らまゐバ一軍せんと目を見せ〳〵く使を罵り追返す
かく〳〵大崎門々を固くもりさまゐ〳〵てかく〳〵小山よ
告〳〵ゐらゐバ正則悦ぶる　東照宮ゑ列よ清洲の守ゐ雑う有
と仰せあり正則大喜び玄蕃を留置くれ〳〵ゐよ斯と告来り
〳〵まゐバ少〳〵召大崎ハ世よちゆまゐ〳〵ゐたりさぞあんと
仰せらまゐ〳〵が其後も清洲を敵ゐ〳〵れざりゐハ大崎が功あり
と度々仰せらゐ〳〵なり紀州より安藤帯刀大崎村上ゐ嶋
よりまゐく武功を尚申ゐ〳〵ゐ真鍋八十四の時より軍を〳〵數
度の功名をかゐ〳〵村上も十四竹子ハ軍より壬生川の先駆
をいひ〳〵ゐ大崎ハ日まゐ木村が許よ小禄よりくゐ〳〵が士大将
よなり又福嶋の家ゐくも士を下知〳〵ゐバ左のゐふゐ〳〵も
ゐバ〳〵とゐへバ帯刀大よ武ゞ〳〵まゐなり又一説よ福島正則流
罪藝州へゆゐ〳〵まゐバ長臣の老ども福島丹波がゐ〳〵ゐ相
集り城を渡さゞべきやゐ否やを論ゞて村上彦右衛門通清殿流
罪〳〵ゐ〳〵も御存生よおいてハ御判形をかゐ〳〵國を引渡さゞ
御判形来らゞバ此城を挽ゐ〳〵く討死の外他事なゝ但本
九ハ上月文右衛門預り〳〵まゐバ上月ゐ談合ゐるべゝとゐ上月聞

て御判形を見せ〳〵くいうでう本丸を渡せべきしといふ備後三
次小尾関石見備中境東條より長尾隼人一勝備後三原より大塚玄
蕃長行有り〳〵を石見隼人をつかはせ廣鳥三原の両城を守り
各人質を城へ入天守へ煙草を積大手搦手共持口を定め
〳〵う安藤對馬守永井右近大夫中國西國の軍兵を率ゐ備中
の笠岡へ著陣あり丹波吉村又右衛門大橋茂右衛門を使として
主君の判形をもんぜ〳〵く城を渡せるの迷惑なりと竹中采女
へいひ送まゝう上使ゆく狀を取寄べーとゝ云て笠岡へ
滯留の不正則の狀を丹波巳下是をもんく城を渡せべし
と相定む笠岡より尾道へ八里初八陸路と定められを安藤
船ゆく行べ〳〵とゝうう加藤嘉明聞く上使ハ船ゆく早く惣人
数八陸ゆく遅くハ〳〵ん上使より遅くハ〳〵ハ男をすてゝん
是非陸をとすゝめらるまでも安藤聞入ず船の事を蜂須賀
阿波守へ相討らる加藤も船を用意〳〵うせ先て某の船
乗まゝとすゝめ此船へ乗く上使尾道へ到ル人数八陸を廻
ゝう大崎玄蕃使を以く主君の狀廣鳥へ来る上ハ三原も相
違ゆゑ〳〵然まゝ三原へ狀来らば〳〵く城ハ明渡〳〵と竹
中のゝとゝ云送る安藤聞く跡先の思慮ゝも及ばず無二無三う
城へ乗入上使討死の時爰へ城ハ門際へく上使討死せバ續
く共なきといふる有べう〳〵只今まゝ笠岡へ滯留〳〵又爰ゝ
日数を送るべきよあ〳〵と云ゝ〳〵ばかり加藤充廣〳〵
子息式部少輔の先陣をせや押出さんとするゝよ三原の城

へとなや正則の狀来りなまこバ玄蕃事故あく城を渡くさり
城よ入くなまこバ士足輕の名を書付くさまぐごとふ配ア至城の
隅々まく掃除くく座敷ふハ釜よ湯を涌ー茶をひろせ至さ
ア翌日廣嶋よ着々なまこバ丹波今日渡ハ〻べきよ城中掃除まぐ
終らぐ下くの荷物ものけ兼くさり明日まぐまくなんやと
いよ永井ゆく我かゆくゆつるる有城和平よなり渡さり
及く下人の荷物を片付兼さり一両日まくなとよといひを荷
物ハ札を付く大手搦よ其ゆより出さるべー相當のあくひ
よ買取んとく城を受取くさりー其翌日寄手の大将頓死ぬ
城中のいひよまりセバ城を持くハ変も計りぐくー危き事
なりと云傳へくさり唯一刻も早く受ゑんとく大手へ進行く
繪図を披き城内の物主どもを呼集め番所寄口を渡ー
海城へ入く飛脚をもく此旨言上ーのくくるとなり古き人
の詠よ城ハ受取渡ハ互よ證據をとり唯今事よ臨むぐ如
く心得べー城主進退窮りくるなまこバ慎むべきなりといへ

常山紀談卷之十九 終

常山紀談巻之二十目次

一 福島正則信濃國へ赴きし時の事
一 正則茶道坊主が義氣を感ぜしまし事
一 井伊直孝直諫の事
一 明の鄭芝龍援兵を乞ふ事 并 稲葉正勝諫言の事
一 大納言頼宣卿援兵の總大將を願ひ給ひし事
一 酒井忠勝直言の事
一 墨田川に橋を掛らるる事
一 板倉重宗京都所司代の事 附 板倉勝重器量の事
一 重宗訴訟を聞きて心得の事
一 板倉重矩の事

一 毛利勝永大坂に入る事
一 池田忠継乾卞士を懐けられし事
一 芳賀内藏允武者振の事
一 佐竹勢今福口を攻る事并杉原常陸武功の事
一 上杉景勝志貴野口合戦の事
一 上杉家の士大将に御感状を賜る事
一 井伊直孝陣代れ事
一 本多伊豆守出陣聯句の事
一 東照宮御父子御陣替れ事
一 後藤又兵衛花房助兵衛見切暗合の事

常山紀談巻之二十

備前國　湯浅新兵衛元禎輯録

○正則配流の時正則が邸表の門前に蒲生下野守忠郷裏門へハ鳥居左京亮打向ひ皆士卒物具しけれバ芝の邸へハ最上源五郎義俊打向ひけり蒲生の士とも正則公命を承りけりとていそぎ邸を出らるべしといひ入けれバ正則仰にも及ばずかく信州に赴くべきよそほひとて熊沢半右衛門守久上月新八両士をよび奥筋の風俗常にかはりあり蒲生鳥居の者どもと門内へふみ入ルに於てハ吾士ども無禮を咎めらる事に破も有ル庭さきたり汝両人門内に有て理を尽し侍べしとてもし聞入ずバかけ来りなば告知せよ自害をもすべしといはれければ半右衛門されバ畏り

難き仰せを兼りそなといひも果ぬふ正則我今日公儀より背き
かく成果しあるおのまさんのなどるやと大に怒らまてふ半右衛
門答るに新八に向ひく只今仰のごとく出羽奥州の風俗のかさ
つある八勿論なり立向ひいるる理を云ふ事入るべしと
其時かけかへりなば追立らまし逃入るべし内ど事ふく末の世まで
も恥辱あるべしさはこそみ入奴なり腕の力はつなんねと切あひて
そなまを注進なり其後殿八いふもなくせらまんやと云る
小彩八もそなるより同心ふと答へしに正則悦で打うなづき
二人がいふ所尤至極なり幾重ふも穏よ理を尽し承引せざば
志のごとくよせよこれしば兩人畏り暴れとて座を立て
門内より出むひるるよ事故なりしば正則信州より速まるる

ここで

○正則常より扱あるく人を誅する事を好めるこ世の人もいひ
ひつくり或時近習の士少れ咎あるく城内廣島の櫓より押こめ食物
をもあるこ餓死せしめんとしるまるふ其士ハ恩を受ずして
茶道坊主罪なるくかるる有様をいとみ潜ふ夜焼飯を携へ
行るる彼士ハ罪あるなふ斯成るる汝只今のふるまひを
殿ゟ召まるばられ罪重るるん又飯を喰るるるとく
命助るべきよるるぞれバとく帰まていひふ茶ゟ云るる
図ず罪より行たるるる後悔なるるる先より既より殺さるべきるの
有るふ君の救ひふくるる一度ゟ生るるるるひぬ恩をうけく報せ
ざるハ人ふあるべこなるも又よるるげるる心ちるるく吾志

を空しくなすふ事ここそ嘗れといへば彼士悅んで仕ふべきく
是を食して夜ごとにふかくのめくしてこと程經ずして死しぬる
なりんとて正則矢倉より行まして顏色少しと衰へ彼士則さこハ
飯を送りくる者あんと怒らまして茶道来り某ここそ
さまたこそ正則ちこと見ておのれ何故よかくもくるや頭
二つよ切ろうなんと膝立あさまして時茶道少もさるべき我昔罪
を得くし既よ水ぜめあひくて殺さるべきりしふ彼人のやひ死さ
ちしなる今日まで見ひらげ命存らへいひき其恩を報ぜん為
毎夜ちのびく飯をたこびひとりふ正則怒まる眼よ涙を流して汝
が志感ずしふあまれとかこそ有べきを彼士をもめまたべし
くく其まく矢倉の戸をひらきて罪を宥め茶道をも深く賞せ

まそりされバ暴悪の人と世よ称しくまでとかくる義よ感ずる事
の切なるなる士のおりひ慕ひく力を竭して正則の為よ身をすて
く奉公しくくるもなふ故ある事ふこそ

○台徳院殿諸大名をめして土井大炊頭利勝をもく来年嗣君よ
世を譲くせのめべき旨仰出さましてこハ皆祝しく奉ぢくる如ふ井伊
直孝黙然としくく有しこハ利勝かくへよ招きいくるる事ぞと問
よ天下乱の本こそと存ずれバ目出度事とハ存もよくくこそ子
細ハいふと問ふされバ其事よん大坂の乱戦後なく江戸石壁
のいくなる日光の土木天下ハ諸大名以外よ困窮せり又世を
譲らせまひなのバ諸大名献上奉る物よ費多く　将軍宣下ハ
饗禮を取行ふべしく愈困窮よ及び下を剥民を苦むるの外更ふ

せん方なくこん是民のなげき紀乱のもとゝ存ずまなりゝやされば
利勝尤たり此旨あり共まゝふかゝべゝとく直孝を御次の間ゝとゝ
なひ利勝御前ゝ参りくゝ出るゝのよゝ申ゝるゝまゝ即直孝を
御前ゝ召まゝ汝ゝ申ゝ尤なりされども既ゝ仰出さまゝられば易難
し扨是より後悔る事なくゝやせと仰らまゝるゝ直孝臣ゝ申ゝ
然るべゝるゝと思召ふより間ゝ召入らまゝるゝ臣ゝ言尤と
思召なゝば御用ひなゝるゝん事仰とも覚えいぬとゝやされるゝ
暫く御詞なゝりゝまゝば利勝臣既ゝ年老ぬ壮年の老直言を
ゝゝ事治世長久のわゝゝるゝ明日諸大名を召掃部頭ゝ旨尤
なゝふより相ゝめらゝべきゝを仰有て給るべゝゝものを
と申さまゝれば　台徳院殿則諫ゝ従せゝ其時直

孝臣ゝ旨用ひさせゝひ辱き旨謝ゝ奉りく退出せゝ
台徳院殿の諫ゝ従せゝひゝ事直孝の直言義を盡せりと
人ゝゝ

又一説ゝ　台徳院殿世上太平といへども嗣君いまゝ幼稚ゝ
わゝゝまゝ總郭を築ゝべゝと仰出さまゝるゝ直孝一人と
かくの詞なゝりゝば各退出の後いゝるゝなぞと問せゝるゝ
仰の旨心得ゝゝゝん嗣君幼稚ゝもゝゝまゝ世ども治平の時
なまゝば一郭滅せゝれゝてゝゝ人々安堵いゝゝべゝまゝ嗣君
幼稚ゝより郭を増まゝるゝば人々危ふむ心を生ぜん事必
然なり且御上京もゝて過分ゝ財用を費ゝ五三年も倹約
なゝゝれば償ひ難く有べきゝ又費を多くなゝゝゝん

よハ郭ハ堅固よ[illegible]も武備有まゝ[illegible]
バ翌日諸大名を召〳〵掃部頭申す旨尤なるゝより昨日の仰せ
如されハ相輟らるゝのよ[illegible]を仰出されしとゝ[illegible]熟まろ
是ある事をもつて
○大猷院殿の御時國姓爺日本よ援兵を乞るゝまゝバ諸長臣を御
前よ召出さるゝ是を捨置るゝバ日本の恥なり援兵をつゝは
さるべき旨仰らるゝ小事〳〵ざるあよ各とかくを申出る
らるゝ処よ稲葉丹後守正勝援兵の事勿るべくゝざる旨再三
申されるゝまゝバ色を変ゝ内よ入せるゝと明日又召出され昨日申
せ〳〵ゝ思召よかなはざりゝ〳〵ゝ御思慮有〳〵ゝ
理なり援兵よ及ぶまゝき由仰出さるゝ

明の末鄭芝龍といふものの万暦年中日本よ来り肥前松浦
の平戸よ住り又長崎ゆとあり〳〵崇禎年中よ明帝よ
召めされ〳〵り平戸よ至り時妻とり〳〵子を生む其子
を鄭彩といふ芝龍官を得く長崎の奉行よ告く妻子
を迎ふ公よやく〳〵ゆるされを蒙るり明滅り時大祖ゑん
苗裔を福州よ建く元を隆武と号ス清と度々戦ひよ及
て勝難き故よ援兵を乞〳〵なり明帝朱姓を賜ひ
ま八國姓と称〳〵爺ハ老成を尊むの親なり芝龍ゞ事明末
の書よ詳よ[illegible]せり
○正保元年ハ明の崇禎十七年なり明朝乱まゝ陝西の李自成
などいふ者盗賊ゝ長となり一揆を起〳〵北京へ攻入明ゝ天子も

自ら繕まつく崩じまひらふ福建の鄭芝龍書簡をさゝげて加勢を乞ふ依て紀伊大納言頼宣卿異國より加勢を頼まゝ事日本の武威四海よかゝやくともやべゝ諸浪人を集めいひあんよハ数十萬も有べゝこれよ西國中國の大名小名差加へられ然るべゝん拙者ハ總大将仰付られいひ何事の悦びこれよるん異國よ攻入おもまゝに日本の武勇を見せやべゝと願ひ奉りまひらまつども御加勢の事やゝかれバ兼て仕へ申武功の物ゝども清兵と一軍ゝ老後の思ひ出よせんといさみ〻る人〻残多き事よといひまひらまつや

○大猷院殿の御時晴れ猿楽有んとする前夜ハ大雨ゆく御前よんゝ〻〻るべき塀の白土壊まつよ

一説よ朝鮮来聘使者出べき夜櫻田の矢倉れ崩れ白土やぶまつゝ〻〻いつり

いゝぜんと人〻云〻るぞふ松平伊豆守信綱白き奉書の紙を以ゝ〻せらまつゝば皆其捷智のほゞを感じあひる処ふ酒井讃岐守忠勝一説土井大炊頭利勝ゝ〻いつり伊豆守よ向て讃岐守ゞ存る而ハ貴人よハなゝぶる事ハあゝぶゝと知せなゝぞよ和仰出されんよ何事も仰のまゝあゝんと思召まつんよハ驕奢をゝちびき奉るよてゝてゝなまゝ其時ハいゝぶゝゝゝゝんといまつよ信綱ふゝく心服せゝまつ〻

○江戸の墨田河よ橋なゝゝを酒井忠勝やて橋を掛られゝゝり要害の為あゝゝんと云人あり忠勝天下を治むふ

人を以て要害とすべし人苦んで何の益ヶ有べき人を苦めて
要害とせば江戸ハ一日もとちてん難しと答へらまてり
○板倉周防守重宗京の所司代なりしが江戸ゟ下りる時松平
信綱對面し　公方ゟも政事ゟ御心を盡さるゝこと京都の事も
委細ゟ申し召なれ是より後ハ同職ゟさし越まこと書状京都
の事詳ゟ記さるゝこと云ひし周防守百二十里の行程隔りな
る事何程ゟ聰明ゟおはしますとも及びがたき事ハ得知し
召まじ其故ゟ周防守を京ゟ指置れこと事なれバ申上ゟ及
ばじと答へられをさて八周防守ハ致身ものなりと越せさ旁
ゟひとを

重宗の父を伊賀守勝重といふ初ハ四郎右衛門として禄五百石
なりしゟ京都の所司代を仰せ出され二万石賜りなり是
ハ本多正信が薦めにて有なり勝重仰せを奉りて佐渡
守ゟ向ひ重職の任を身ゟ受けし事ゟ御ゟ帰りて妻な
るものゟ相謀りて若同心をば職を固辞申上べきゟ申
なるゟ正信打うなづく勝重家ゟ帰りてかゝる仰せを受し
なり重き任なるべ内縁を頼て訴へる者あるべし公私ゟ
付く口をとゝへらるべ仰せを畏り奉らんゟ申てもいろ
もなんとなしバ只今其ゟ京ゟハ趣きんとしていと
きたれバこハいかゝ事をのゝまめで仰せをかこむ世の
女の所いうで公の御事ゟ事ゟ出さるべ先といそれしゝば
はしばとく出る時たるものの腰を抜ぬしきこれをこれ

ハいふといへれるまゝバ勝重さまゝバよかゝあるべしとゝひゝく
ゝく重ねよいまゝあゝく後仰を奉ゝらうと世よハいひ伝へさ
ゝ勝重尾張の恵阿寺といふ曹洞宗の長厳和尚が弟子まて
長祐といひしが還俗して四郎右衛門といひゝ勝重嫡男を重
宗次男を重昌といふ二人ともに江戸にあり或時　大猷院殿
訴訟をひゝく巧に構へさせるひ二人をめゝく判断せよと
仰有りゝ重昌仰を奉り理非分明に決定しゝく退出に重
宗やゝ久しゝく思慮して後重孫ゝく決断の旨を申上ハたや
ゝく退出して二三日ゝてゝく後御前に参り判断の旨を申さる
ハ弟の重昌がやゝゝふ相同じ人を兄ゝまさりゝる重昌ゝ
ゝわゝ仕ゝり其後勝重京より江戸に下ゝり時

大猷院殿かの訴ハ判断の事詳に示させるひ重昌が才器
を御感あり勝重兼ゝ内膳正ハゝゝ氣ゝて思慮あゝく周防
守ハ國家の政事をゝゝゝゝも其任に叶ふべし其故ハ訴を判
断せる事ハ政事の一ッハ條目ゝゝく政事ハ至ゝく重き事に
ゝく一言を以ゝく天下ハ利害にかゝゝ苟にきゝめやべき事
にハあゝゝゝ政事ハ大事とゝりかゝゝ思慮いゝゝゝへバ重宗
ハ政事をゝゝゝゝも仕損ずまゝゝく只打見ゝる而を以て
曰ゞ智慧を人に及ぶせんと存ずゝ而ハ重昌がゝゝまゝゝ
にゝく思慮をゝゝゝゝるまゝバ御感浅ゝゝざりゝゝとなを
其後伊賀守年老ゝゝり所司代の職に任ずべき才をゝゝ
びゝゝ汝ゞ替りふせべやと仰有りゝふ勝重子ゝゝく周防守

所司代の任よかるひいらよ申さうらまバ内〻其ごとく思召まつ〻と仰有さう周防守ハ斯ともさ〻で御小性ゆてなりふ父伊賀守がかたうふ仰出さまつり周防守上京せられよ伊賀守衣服をあ〻らめ左右の職よ居る人を並べ玉記禄をも悉く取出し周防守を上座よまねき謹ぐ江戸静謐の事を窺ひ今日より所司代ゆまバ萬事引渡しふといふ周防守只今まぐ御側よ仕へ奉り世の有様ゆめ〻存ぜぬ仰ゆる父をなんあ〻ひいへよの事なりとやさまつよ伊賀守いやく其職よ居るべき者なりと擇出さまつれかゝる重任の仰ハ奉りかたと覚ゆるなり人の心々面の同じ〻ざるが如し我よ付そひ居まつまバとく〻我よとなる〻時ハ自ら決断せるより外の事なし汝が不才を隠しゆバ五畿内ハいふまや及ぶ西國までも禍有べしちつともかざる事有べらず只不才とあ〻らはを第一とたべし不才をもろ〻めさまつゆバ其任ふ當るべき人を擇ばれく仰付るべし更よ恥辱ふあらず今日より所司代の職よ居るべしといさまつらば周防守其詞よ隨まつぬ勝重ハ町家をかりる玉さるがそふ引移ア碁をすて日ごとさつる今度の所司ハきびしいものよゆまをあひたらひさるがゆくゆゆゆバ必罪せられなんとく碁をすゝあり

〻と我〻

○周防守重宗京都の職よ有ること凡三十餘年人敬ふる神明の如く愛する事父母よ似うり父子城よ同じ名臣とぞゆたし

さまこバ重宗ハ寵恩も殊ゑ厚く従四位上ゑのかみ官左近衛
少将ふさ〳〵このまてゝ重宗職ゑ任じて後毎日決断所ゑ出る
時西面の廊下ゑ〳〵逼ゑ伏拝もゝ有く決断所ゑ出此所ゑ
茶磨一ツおもゝ亟あゝ障子引きて其内ゑ坐し〳〵まづゝ
茶ひきて〳〵訟をゝ人皆不審し〳〵へりゝるゑ遥ゑ年経て後
阿人ゑ〳〵ゑ重宗答へく先決断所ゑ出る時西面の廊下ゑ逼
ゑ拝もゝる事ハ愛宕山の神をあがめ〳〵ゑ多くゑ祈中殊ゑ
愛宕ハ霊験殊あると少し程ゑ所願ありく〳〵かゝ有ぬ其
所願ハ人〳〵日重宗ゑ訴をこゝろ〳〵んゑ心の及ぶ程ゑ私の事あ
らゞ若あやまりく私の事ゑ〳〵ハ忽ち命をめされゝ年頃
深く頼〳〵まるゝハ少も私心有んゑハ世ゑなゞ〳〵へさせゝゑ

なゝ毎日祈誓するゑく〳〵又訴をゝゝる事の明らゝ〳〵ぬハ我
心の事ゑ〳〵まてく動くゞ故ありとゝひなゝぬゑた人ハ自ら
動ゞ〳〵んやゝふゝてあゝめど重宗ゑ〳〵まゞの事ハ及び難
く唯心の動と静あるとを試るゑハ茶を挽くゝる心ゑ〳〵て
静なる時ハ手もそまてゑ憑じて磨のえんゞるゑ平らゝく
きゝらまてくおつゝゑの茶いゝゑと細やゝなり茶のこゑやた
落る時ゑいゝりく我心も動らぬと知と其後やゝやく訴を
とゝゝ又明障子をへゞてく訴をゝ事ハ凡人の顔ゝゝりゝ
打んるゑりゑくさげあるとあゝれまゝ〳〵とあり誠ゝた有
ゞゞはゝきあり其品多く〳〵いゝらと云数をゝゝゞゞる
ゑの誠ゝきとゝゝゑ人のいゝゑ事ハ真実とさまゝかゞまゝ〳〵と

見ゆる人のあはれハ何事もみな偽と見ゆめれまじき
人の訟ハ枉られたる事有らんと思ひそれにくげなる人の争ひ
ハひが事ならんと覚ゆ是等の類ハ目に見ゆる所に心ひかるるまま
て彼詞を出さぬうちよりや己が心の中に邪ならん正しからん
よからん直ならんとおもひ定むる程に訟の詞に及びてハ我
好む方に聞なれば多し訟のなかに至てハあはれむべき事
憎むべきありにくげなるに憐なるあり誠しきに詐有
此たぐひは事に多し人の心にて測がたきかたちを以て定ん
事叶ふべからず古の訴訟を聞にハ色を以てしたれどもそれ
ハ重宗が及ぶべきにあらず又さしぬる訴の庭に出んハおそろ
しかるべきによりて生殺を司る人を見てハいぶせくて自

いふべき事をも得いはず罪なきも科ありて人あらんと思
へば所詮互に面を見んも見られもせぬにまさらじとおもひて
かくハ座をへだつるよしこそあれと答へられけるとぞ

○板倉内膳正重矩の事

重矩ハ伊賀守勝重の孫にて嶋原に於て討死ありし内膳
正の子周防守重宗れ従子なり瞎にて長卑く以の外
見ぐるしき人なりしかども有徳賢才のきこえありて
寛文二年禄二万石増賜はり大坂の御城代より寛文五
年大雨にて雷天守に落て火出て焼上りしかバ大坂の
ものども大さわぎなりしに万治三年雷火有し時塩硝の蔵に
火入て死人多かりしを聞およびしかばありなり内膳正町

奉行彦坂壹岐ち石丸石見ち兩人ゑ塩硝ハ皆濠中へ入さ
るゝ〜ふまさせらるゝ騒だ静まりるゝとゞ内膳
豫警衛の備かゝ〜下知〜置ま〜放尼ケ淵の青山大膳亮
人数をひきゐる大坂ゑ来ア其備をゝく深く感ぜゝる此
旨江戸へやゝるゝ〜ゝバ御書を賜ハり称美ありゝるゝバ内膳正
即ち家士を集め是皆汝等ゞ功なりゝと譲ゝまゝ〜とゞく
同年の冬江戸ゑめ〜一倍の禄を増賜ハり執政の職を仰
蒙らるゝゝ同八年京都所司代牧野佐渡守正親のか
ゝり仰出さゝ内膳正をめつく京都ゞ事を
司らゝめゝふ上京の後叅内の事あり此禮儀御簾を
半巻上らゝ〜例なれども内膳正恐懼をゞき事なれど

天顔ゑ咫尺〜まるゝの名有く其実なゝ御簾を高く巻
上らるゝゝゑ〜と奏聞有〜ゑ尤なりとゝ勅ゆく御すゞれを
高く捲上らゝ〜事内膳正一人なゝ〜ゞゞ其後又一万石
増賜ハり下野の烏山城主〜〜重矩若きゝより詩哥
ゑんをゝせ學問を嗜〜熊沢伯継ゞ門人ゑく嘉言善
行多ゝうき京都ゑく加茂川洪水の時白川より加茂川
四条の間〜堤をつゝせまゝ鞍馬の往来市原ゝゝゑゑ水
流まゝ往来の困なゝ〜ゝ田地をもゝめ川筋を除き
山路を開ゝまゝ〜ゝバ内膳死後ゑ及く此地の百姓ゞも仁
徳を慕ひ如意谷ゑ内膳正の位牌を設け跡をとゝ〜ひ
〜ゝなり

財寶を奪ひとる者をむしより盗と名づく我つらく
おもふに大名は盗多く下士民の善あるをあゞぶ〳〵てをつる
ハ是人の善を盗むなり中ハ親族朋友ハ善あるを称せ
ぶ〳〵くるハ是も人の善を盗むなり中ハ君たる人ハ
下の善をあぐべき職は有是天より命ぜられる任なり人
此善を盗ゝく天命の任をかゞぐハ盗の大なるもれなるべし
あ〳〵人の善を盗んやと是のみ心をとゞめよと語られる
又伯父周防守ぶ語り〳〵ふ人此生質さほぐ有中は見る処
のゆゝ紀者あり愛さべき人なり此ゆゝ紀人をたゞハ善
言もたゞ〳〵さほは冥なるぞうし〳〵況や直言をいへばいよ〳〵憎む
ものなり又愛さべき人のいゝことハよゝ〳〵ぬ事もよゝ〳〵

なるものゝこれ心得べき事なりと父なり〳〵伊賀守常戒
られ〳〵ハ格言なりと又語られ〳〵ハ倹と名と相似〳〵其本大
は吳なり倹ハ事の費をいとひく奢侈なゝ〳〵用ふべき事
ハ財を用ゐるをいゝ名ハ是非の論なく一向は物を惜むなり
又戒め〳〵れハ是ぶ心は叶ひゝる者れいゝことハ何事もよく
学ぶ行路のよゝ〳〵ぬも心つゝ〳〵ぶ又我事を悔る所なく直言
さゝ〳〵人ハ道理の至極せるをも外ふなり〳〵其間の無礼を罪と
ひは是皆事を過つのゝなりと其前一万石は中甚貧〳〵
ゝ〳〵ふ新は倹約は法を定め先自られ事を第一とする
まゝ〳〵時の哥

あゝめるれんもこゝろのつゝ但せゝるゐ者こそ安られ

○関ケ原乱の後毛利森とも記せり豊前守勝永ハ土佐へ流罪せられ
る大坂の事起るとき聞或夜妻よいひけるハ我罪有くかゝる所
に居住し汝をも斯うきめ事をなすべきよされども我
志あり剛なるハゞ妻のいとく世の変
ハいかゝ人もたゝるべくかく成たるとも更に無
むべきなれ妻ハ夫に従ふ道なれば其御志を兼
らんやとて勝永云我武名を偽へく数世に及びあるかく
流し罪なる事口惜き事なり命を秀頼公に捧てん
と思へども我爰を忍び出ばうれ憂ぐうへふも怪しきやう法
身の上に添らんと涙を落しるる妻つくくとやく打笑ひ
弓箭取の妻となりくいとでらかゝる事をなるれなんや

たゞや此暁船に乗くし武名を潔くしるべき君のゝ家の滅び
何事ぞこゝまでふもちろんなりハゞ事なるひとをいふもなり
るひゝゝバ此鴻の波に沈こんじ運命めでゝく頓て死
らん急きのへといひけるまゝバ勝永脱んで小丹に取乗大坂に
ありし龍城しるに其後内対馬守より豊前が妻を固く
いまゝめおもかくこと告らまゝしゝば　東照宮ゆゝ召勇士
ゝるまゝの志感賞ゝべきなり豊前が妻罪すゝ事有べ
らぶと懇に仰有るまゝバ豊前が妻大坂の城中に入るゝ
一説に父壹岐守勝信も土州に流されしゝ病死しゝ勝永
土州にゝく年月を送りるゝ時く其後土宮田甚三郎を大
坂にゝり其従弟なり大野修理亮が方まゝく秀頼の無

事を問せたりかゝるよ大聖より秀頼兵を起され
告やりしかば勝永土佐守忠義を欺き関東へ恵を致
さべし先非を改め奮領より復せん志なりと云く土州よ
り船より乗んとしるゞ甚三郎を呼く我大坂より来
ば嬖子式部次男藤兵衛と共に山内家より殺害さべし
如何さべきといひしかば宮田夜より入く陸より式部乳
母の子小原文右衛と相謀り難なく式部藤兵衛をつれ
て舟より来りとれば勝永悦んで船を出しとゝ小舟つまて
大坂より至りきりといへり

○池田左衛門督忠継ハ　東照宮の御女北条氏直の妻北方ゆて
なりしるゞ小條家亡びく後國清公より再嫁ありく生き
きりしは　東照宮の御外孫なり大坂冬陣より八十六才な
り一旦和平より成く師を返されし後軍より従ひし士ども多集りて
物語する時一人の云若き殿れ此度の軍より日比と大より違ひて諸夏
の下知鬼角いそん初なり中ゆと今よりく詞小少さぬ事一つあり
仕寄場ゆく寒気さびしきよりさて苦労なんとく小き手摺
より酒を入くるゆ又綿入の肌着を賜り此事ゆめ〳〵人ゆ洩し
そと仰らまし志の忝さ忘まじく況れど語るなと仰あり〳〵
今まで洩さじ〳〵いへば一座十四人多をおくこまし〳〵も
其通なりき我一人のあひらひなりとひとひより皆斯のめた
ハきめ〳〵すくなの死事なり〳〵感じあひくまそ

○大坂冬の城攻より興國公の攻口ハ天満橋の辺なり〳〵小先陣の士

大将波多野掃部須加左京竹把を付るゑ兵少くして夜ゐな
らでいくゆも調ひぐくれ日のうちまゐ八兵を増ゐ八ら
といひしかば其様をよく来まてく芳賀内蔵允先陣ゑ
芳賀八苗深の羽折ゑ先陣の兵ども家屋の焼け土蔵の陰
ゑ扣居く樗より上ゑ出の株れ八ま出よといへバ芳賀
さくみ行芳賀近ク寄せ来ぞ武者ぶりよくいひあく
芳賀馬より打りて徐ゑ川岸を歩むを城中より打出る鉄
炮川水ゑひぐまうくまうる芳賀ちうもけうぶ足の数とか
ぞくく帰ていゆも兵ゆくくふかゐひまでといくく旗本ゑ
帰るこの芳賀八ゆゆく祐筆ちゆうゑ岐阜落城の日國清公勝
軍の書を芳賀ゑ書せれ時麓ゑ将机ゑ倚くおゐ芳賀其

前ゑ跪く左ゑ小城中の焼ちる火塩硝の庫ゑ入く甚ちる山嶽
の崩るゐごくく敵押寄るうと騒ぎゐ芳賀ゑ筆把くすく
様ゆくと後く体あるうくゐ事ゑよせく就らくゐ小器量大な
アくまバ頻ゑ用ひらまく禄二千石賜ゐ後國政を執ゐ
度々直言を諫め争ひくこゆくよく治アくう

○大坂冬陣ゑ佐竹義宣今福口を攻る土大将渋井内膳先陣て
柵の木を打破る佐竹ゑ付くまて軍の目付安藤治右衛ゑ屋代
越中守先ゐくくく安藤さハやうに物具せくを柵のゆより鉄
炮ゑく曽の上ゑをかゐる安藤折くまバ頻ゑ打くけて立
上り得ゐ屋代父子伊藤右馬允かけまりいゐゑ安藤日比八年若
くくて自慢せくゑハ半ぐくうといひく柵を打破る木村長門

守重成城より助け来て柵を隔てゝにらみ合たり木村ハ黒ま
平袖の羽織を着し柵に取付てあられ鎗にて突崩さバや
とひくしも鉄炮の足軽ちり乱れて来らざりしに井上忠左衛
とりなる鉄炮持せ池来りたまひバあの鳥毛の羽折着たる敵ハ
物しよ打落しゝと下知して柵の木に鉄炮をもたせて渋井が
胸板を打通れ木村たふれてかゝり寄手を追崩して平塚五郎
兵衛渋井が屍をふミこえしを木村か従者首をとらんとすれバ
平塚其ひとゝる首何にせんといひつゝ敵を追ふる義宣使者
を上杉景勝によりて加勢を乞まつりくば杉原常陸援合に
兵を出れ附吾物具以の外にふるく
日本國の弓取に笑はるべしとて猿楽の半臂を用意せしが其

日物具の上にきて麾の緒を腰にむすびてさげ七百計をひき
ゐて川の中れ洲に進みしかども水深かりしバ玉薬を惜まれ
こみて城兵を打ちしまれ軍兵を下知せらるに進退そのの
まゝなり杉原が士卒を下知せる有様を諸将の陣なりを静め
て見物を譬へバ馴たる雀の子を呼に似たりといひあへり
東照宮遥に杉原が出立を御覧じ上杉が家ハ古風なる出立
鎧直垂をきたるなるべしと仰有しハ半臂を遠く御覧有り
ての事なり其後上杉家の士大將に御感状を賜ける杉原
御前にて謹で上を包みたるをとき讀終り始のごとく包て本
多正信のかたへ見やりて感じ仰れ詞殊更に忝く覚えれ
景勝武功を賞せさせたまふにあつかりてハ倍臣までかゝる仰を蒙る事

謙信弓箭の迷風を天下まあぐるあまんといひく退出ふりを
○志貴ノ原ふく上杉景勝先陣柵をやぶり井上五郎左衛門を殺
して敵百計ありて大和川まぐ攻入る時景勝直江を呼く城
兵援来るべし先陣ハいかふ尚直江先陣ハ士卒少くゆへども
安田上総介二陣ハ隅田大炊介長則よ定めれとたいやく
隅田を先陣ゆて二陣を安田よ繰かへよと下知せらる是激の
道なるべしかくく安田ハ先陣を二陣よりかへれ口惜き
事なりと歯ぐみをなす隅田ガ軍兵ハ安田よ踰く功名せんと
勇々両陣とも勇氣倍しかと廿六日曙よ隅田押寄多切豊後
守真先かけく首を得北条清右衛門殺死遂よ打勝く
井上五郎左衛門を付取柵二重破りるを城中より大軍戦

先まとを向ひ大野修理治長木村主計頭宗重渡辺内蔵助紀
竹田永翁等競ひかゝる隅田ハ百挺の鉄炮を一の木戸口よ立固め
打てさせまてゞ城中よりれ加勢真黒よ成く切てかゝるを
半時計さゝく戦ひ鉄炮の物主石坂弥左衛門一足も引せ討き
終ふ立らまゝ二陣の安田ハ兼てよりかゝへよ陣をもうせし
故隅田ノ士卒景勝の旗本前へ崩れかゝる景勝三陣の士大将
杉原常陸親憲金の輪抜の立物打ゝる曽を見金ぬ鎧の馬印
をゝく大将の仰て隅田人数両方へ引まゝ伏へと呼はりく馬
ゝゝを打ふりて下知ゝれバ隅田ノ兵忽ち両方へ引れて
引取ゝり杉原敵をちゆの拵よ近々と引受て前よ立るゝ
鉄炮を両の降ごゝく打ゝゆゝゝバ安田二町あまと脇ふひん

さるゝ横あひに鎗を入る隅田も忽ち討負城兵を追崩せ
隅田ハ初より討負しを口惜くおもひ徒者五人にて敵の中
に紛れ入首二ツ取て帰る景勝進んで押結んとすれども
久世三四郎乗来て俄に城を攻バ死傷多くして後陣の堀尾山城
守忠晴と入かゝるまとよと仰せとふ京勝ゆきもあへず弓取
の先をかゝるふ時一寸まとといふ事あり今朝よりたゞく
軍しく取安くしかを人に譲て退くてやれしくふ
動らば丹羽長重景勝の陣ふ引きくるまゝバ景勝待机に倚て
城中をたゝと睨く物具もせずしく青竹を杖につき左京
軍兵三百計鎗を接くしく跪きく紺色に日の丸旗毗の文
字の旗二本に浅黄の扇付馬にて押立ちづまりかへりて
長重を見もまゝせず長重も勇持なるゞ後に人ふ詰くく景勝を
誉らまつる

○東照宮志貴野にて功名せし景勝の士大将に御感状を賜ハりしに
安田上総介ハ横鎗を入て城兵を打破て功大なりといへども直
江と不和なりしゆゑに其功上に達せず御感状賜ざりしハ其
後人に向て此度御感状を被受しなく目出度に上総一人ハ
中立て人なくしてはべりの武功なりしかされども
やうし事ハいかゞ是をもとめる武功ハ中なるまでもなし且殿
の御為に命を捨て軍仕い高ちりぐりも公方のくあふする事
よりいかゞ是より後も殿をこそ大事におもひゆへ公方の御感
状何の糸面目に存でやと語てこそ

○大坂の事起る時井伊掃部頭直孝を召て兄右近大夫直勝を
陣代をゝて仰出さるゝ
直孝ハ直政の二男ゆゑ母ハ松平周防守康親の従者ゝ女なり
直孝六ツ歟の時母の方より直政ゝ送りゝると百姓の許ゝ置き
ゝるゞ十三の時民家ゝ盗の入りさるゝをゆかけ出ゝ暗夜ゝ
事なるゝ盗山へ登りゝるを追うけゝ高股を切ゝ落されゝを
かゝゝ人あまゝ来りゝく盗をバ打殺しぬ直政ゝ申ハよび
奇ゝく冬の事なるゝ北ゝ向ゝる座敷の雪ゝ入るゝゝ跪ゝせて
置まゝゝ雪ひさを降うづめともちゝとも動ゝず直政悦んで
呼入らまゝ犬の子をあゝゝらまゝゝ十四の時直政病重くく
死ゝ及ぶ時其生さるゝやゝちゝゝん麿ゝ甲を添くかゝみ
ゆあゝゝる直孝ハ上州ゆく一万石を賜ハり大番頭を命ぜ
る直政の長子父の跡を嗣とゝゝ多病ゆく公事勤労しゝ
しゝゝ
直孝ゝゝゝく仰ゝ任せゝまづ宿所ゝ帰ゝ彦根の長臣ゝ集め
仰ハゝゝゝなれども各我下知ゝ従ふべくハ陣代を勤むべしゝゝ
ゝハ仰を固辞しゝゝとゝゝゝ皆いでゝ下知ゝ背くべきとゝゝ
を守ゝく後仰ゝ任せゝく陣代仕ふべしゝとゝゝゝる井伊の家ゝ
兵庫とゝゝる者しの年老ゝゝる有しを直孝呼出しゝ汝日比軍術ゝ長せ
ゝゝゝゝ相傳ふべき事やあるゝと問ゝゝゝ兵庫年老ゝく今日をゝゝ
ざる体戦場ゝ出ざゝゝゝ遺恨ゝゝく懐より一巻の書を取出
大持ゝる人志を決断しゝく孤疑なく下知あるべきゝと問直孝ゝて

教ハいかゝも我思ふまゝよ他故あく決断さべしと答へられ給ハ
兵庫臣ゞ年比思慮せしかゝ只是のみかゝん兩端を持して兵
の道行ハゝべくゝ外ふやべき言なしとて其書を焚くるとぞ
元和元年の春直政ハ領國直孝相嗣ぐべき旨仰出さる安藤
帶刀をもつて再三辞しやせども許されず十八万石を分ちて
直勝ハ三万石直孝ハ十五万石賜りぬ其後五万石増與へら
ゝ　台徳院殿　大猷院殿五万石づゝ賜り中將ハ
任ぜゝ給ふ

○越前忠直大坂ハ師を出し給ふ時士大將本多伊豆ゟ僧を集めて聯
句しゝ給ふ時机ハよりかゝ聞居しゞ勇將麾下無弱卒といひしハ
かゝるより高祖帳中有張良といひしを聞く門出の目出たさよ

とそ申さゝり

○大坂冬の軍ハ　東照宮ハ茶臼山　台徳院殿ハ岡山ハ陣所を
うつゝ替らゝ事あり諸將も城近く陣を設け若騒ぐあ
ば城より撃て出るあゝん陣を整へ備へと五の字
ハ御使番乘めぐりて仰を傳へ給ふ井伊直孝陣所を聞くと
鉄炮を押あゝべ城中ハ打ん関の声をあげ只今城ハ攻入ん
体ありゝゝば　台徳院殿直孝兄ゞ陣代ゝなり人をつかへ
ゝゝと怒ゝせられ本多正信を　東照宮の陣ハ使を命せ
給ふの御前ハ高りて未刻ハ出さゝるを直孝ハ父の子なり
ゝふ陣所を換る時味方ハ競ハせんとて鉄炮をうゝせゝと
仰らるゝれバ正信兼りかゝるべく思召の同じきとも申ゝ

きもをどろかし直孝ゞふるまひ感じ思召あるゝ其由をきせと仰らひきこゝゝ出るあり

○大坂ゟ城兵千波を焼る時後藤又兵衛備前勢必ゝ戦ゝ若き人々待伏〳〵功名あまてといひきまバ後藤ゞ詞きゞハゞとく待伏〳〵ゝゝゟ敵つけ来らバ後藤ゞ功名ゞてと嘲あるゝ後藤積りも時〳〵ハきゞゟあるものゝ備前勢付ざるハ花房助兵衛まゞゟゞゝく居まなんといふ

按ゝゟ此時備前ハ池田左衛門督領せきをゟひゝられバ花房ゞ事を引るべきゟあゝバ若や花房をゟく付まひ〳〵そのいとまをきゝゝバ

此時戸川肥後守達安を始とゝく畑まゞれよ出けんとゝひゝゟ

花房ゞ城中ゟ後藤とゝゟ功者あり必兵を伏置〳〵ゝゞ〳〵と止めゝく付ざりゝゝ畑消ゝゝくまバ花房ゞ云〳〵ゞとく果〳〵て敵待ゝけ居ゝゝり其後和平ゟ及ぐ肥後守ゞ弟弥左衛つ後藤ゟ対面〳〵様々の物語をゝる時千波の事を云出〳〵備前勢の付ざるハ如何ゟと問ゟあ人のゝゝゝり更ゟ半ゞハざりゝゝまゞバ人々聞傳へゝゝ称〳〵ゝゝ花房助兵衛職之ハ秀吉の心ゟ忤ふ事なりゝく佐竹ゞ許ゟ流さるき居々ゟ　東照宮御心を付〳〵き花房ゞ子を武州長泉山本門寺の上人ゟ預け置〳〵を後ゟ榊原康政養ひゝく飛弾守といふ助兵衛老衰席上ゟも人ゟ扶けらゝゝゝゞなり〳〵ゟ

東照宮ハ仰ゟく大坂ハ軍ゟも従ひゝゝり乗物ゟく攻口ゟ向ひ軍急ゟゝバ吾乗物を敵ゟ向てきてゟ妻を墓とゝひゝく出ゝゝと

二十九ノ終

ぞ云々　東照宮御ホ巡りの時道のかゝへよ兼物を盃其中ふ
蹲居しゝゝを戸川肥後守かゝとやしゝは花房大事の時と
おゆし武を好むゝ老ぬれども志はかゝゝに誠よ大丈夫なりと
仰せらるゝ

常山紀談卷之二十終

發行書肆

江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同淺草茅町二丁目　須原屋伊八
同日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同　所　小林新兵衛
同芝神明前　岡田屋嘉七
同本石町十軒店　英大助
同下谷車坂町　和泉屋庄治郎
京寺町通松原　勝村治右ヱ門
備中倉敷　太田屋六藏
大坂心齋橋通安堂寺町　秋田屋太右衛門

早稲田大学図書館
011688998184